



古今著聞集卷第十五

宿執 分二十三

宿執者天性之底濶著也文武以下諸雜  
藝稟其道思其名之者雖賢老雖奇捐人  
皆有癖不能歎羈是又前累之令歎欵  
之者也之半身不遂也湯瘡而薨于五  
十九宿執信のりびてふうりゆへたるも  
あびつらうまつぎれたりとすけねりのむり  
難のかねども附の古室ふくろうされどあひまびと  
まけりとおがめりとば作まれべ助信の

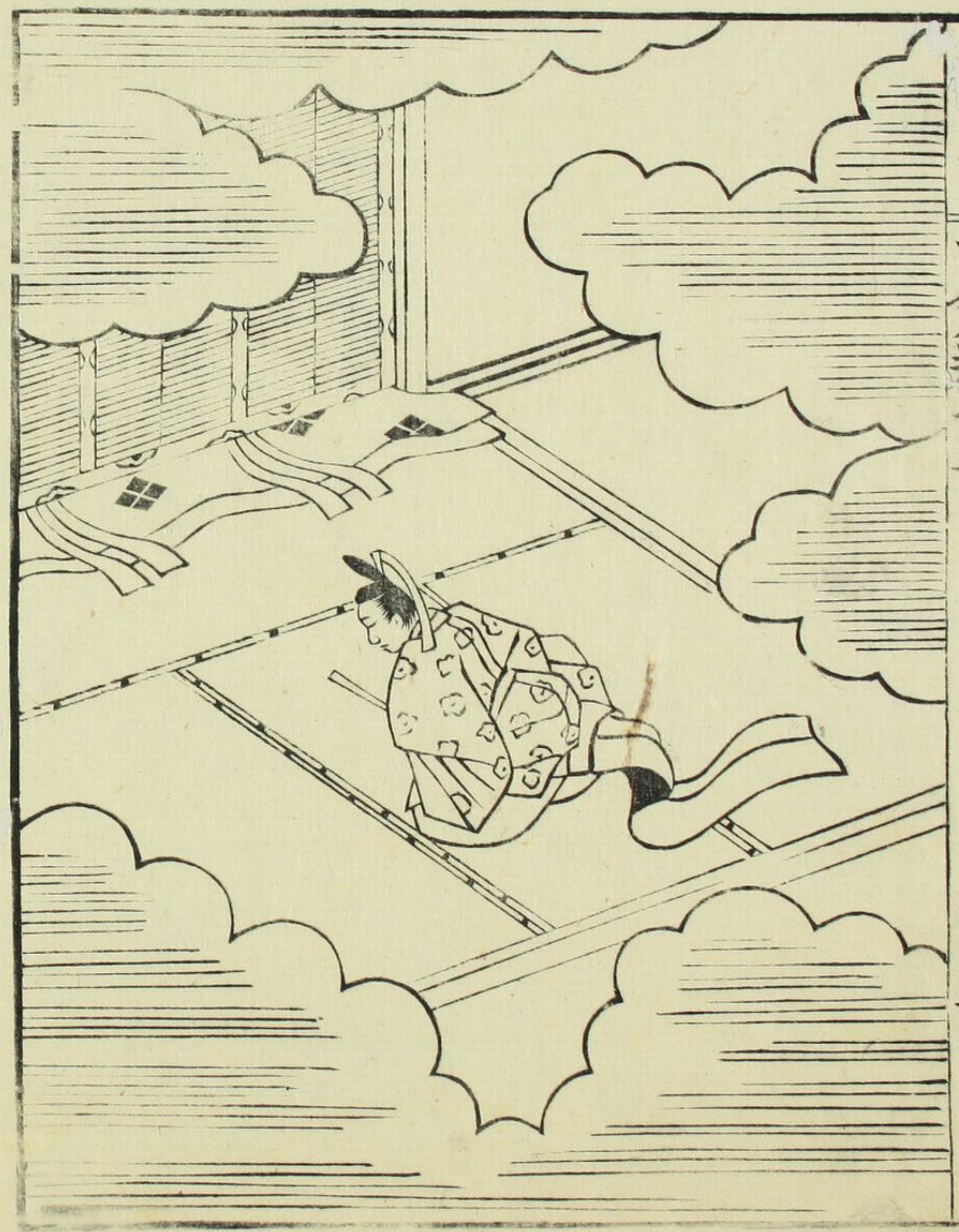
ゆく所るをせば、いび傷かど命もぐくべと傳れ  
きり助後おけのす、とて傷て死ぬ。まことに、かの先人おとこや、かの後  
からてありそえがくを自にかく尾張びわの種たね、  
あひく傷ふを極ごく傷とよ門もんのまをるがあたり  
里さちをに穿うんの木きの下しで、うきよて前まへとて、  
旅たびの宿しゆをうち縫ぬいとば縫ぬいふそくの縫ぬいを  
よだれぬとひよにあくつまも寃くら意いのまえ  
えされば、あきるのりのまじ傷きずがうきたば度たど傷  
あくづく傷きずて、うきよて、かの傷きずのままで、經つ  
我わとを経つて、かのまわすて、ぐりはづひ二人

カドシ因時いんじふ取とりよぎりあきのすへじ事こといづき  
の冒ぼ起おきふとすととひよりぬくねぞかく  
て、この方ほうには神かみのあくまれるの宝たからの正紀せいき  
背せきを張はる夏なつ競きる食く殺ころも、あ庇ひ到いた坂さか東とう勝かつ  
えくめああああ、とせりやうたす

嘉保二年八月十六日因流いんりゅうふり草くさりうて、競きる正紀せいき  
秦せん近ちかまと下野しもつけ助すけなとづひうり道みちまへは室むろよ  
事ことと、鞍くらかおの事ことと、よ助すけなは室むろよ  
さよの傷きずの傷きずめいりのわんととめぐとして義ぎ荒あら  
傷きずのりやくひひくアキラの最さい荒あらのいとれま

今夜か結ゆくらて起るよとやうふまひといま  
とやうりかああうとあひうごとひうれを  
助ふうでうちてあねびきうがひよきうだてか弱  
せききうりと自立行あく報とあてうさる  
助友とてわく病とくとじゆ家と病と  
あうをゆがふ病とあけあく付助友病は  
て座ぐて死ようり命にうも難へえ難はふ  
きうねま車へばす助信うづひよと問  
あたはく行るに因り比ニ安ゆりけるめやし  
く名もと但承保の江紀み行ひ近至りもす





て助あがる近まとわひのとくの日がるで承  
義深はるの義の祀とも助あらぬれにまほ  
又くやうされば助あらぬやうにて原へ  
近まとうもあまくゆくやうどもあらむ  
平生はりはりを守候すますせらどもとろ  
りこちうまく間のゆゑあむの人にあらむ  
あくつうきの間をだれぞをとぞ多候を  
大急ゆま常めて候ふとはすよとくを候ふや  
山千重院ふ廣法といは傳をゆりつ

法苑經をもと見て極あよ後であるより人の  
差よえてお假帳よりの墓やよあどて假を  
教じじまもとてうげりきり改葬して墓を  
拂ひきしてうがる所も假のまことうがり  
たり生の時うり拂一あれる所は假もち  
なれいとぬきよつきて拂ふあら  
よし生れんぞれづれまゆふかと  
同西塔の傍多々もは實へきり仰一足ハ七日  
でたよみくらむわられぬとく又モ寢と云  
傍をうちそと年法苑經ふゆて假り

さる紀序本完背山ぶりうて寄くらぎる承  
を人へるをもて法苑經とむしませえきり邪  
禪拂りて御のまやしぬわや一くらきく御ふも  
經成るよ年序つる白骨わりをふる數せば  
一くら白骨これつる角りの骸骨せゆかあき  
らめうるをもて我のあれ敷山の傍あてがき  
りひき拂りのるじよ拂りて文モとあ生リ  
法苑經立方却と禪もんとがとだつて生  
分ひすてとうりかうとあらがふ生めざれ

とひたを取と彌滿せんぐつまよに通とくへ  
今年もとがふるみとりぬぬまに兜卒肉馬  
み生びる、とひたをりま齋け事とゆえ孔璋  
とめてうりみそりかのぶとのまみや草  
靈夷祀みそくの山にうじさんせんす彌滿  
鬚鬚ありとくとくとくとくとくとくとくとく  
のむへ着手の執ふひわく意よもうが爲す  
みうたれとくとくとくとくとくとくとくとく  
嘗傷赤蛇ハ御くとくとくとくとくとくとくとく  
さこの財万承あはゆくとくとくとくとくとく

遷化したるあれも宿祝のうれず  
自の身の山附時資成多うて豊秀喜ニ節丸  
小ち應納無利ホの秘事とくとくとくとくとく  
主をあはゆ財貨無と解一とくとくとくとくとく  
商討してとく商人の後ハヨリ業にあら称ばれ  
秘とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
いそつあらうげどあれふりうて云氣ふりう  
すぬふりうと後則季と先一と多角波余れ  
のまひの秘とたとほふるまじ作をせんべ  
勅ふれどてももくとくとくとくとくとくとく

則季はくわんゆうえれくを氣ふほゞきにまう  
を後二而丸が密さうそやんくもうぞせり  
あれハ伯耆ゆよちらくろてみそらるれまう  
はの秘すせんくらじきうとくわそのうと  
すにて財資グ先年の大旱ひかへく度  
おうひくやうとくで作すみやうも段ハ箇別  
あ礼情ぐ密是小院基政シキヨウキイシ石井情方イシイチヨウと  
事成明うせきり少佐シヤウザと大考オカウ小つきて藩主  
とかうをれど一年強ヨウめあらしくうこを  
はく一起被ヒツギとあて後一だり不善スルとば財安小

つまし納穀利ナリとつまうりとせんては量額リョウエキが  
足給ヒツギひくらうと起稿文シキヨウモンは段代耕シダウと  
うみく院小イニシされを勅定セキテイ小使シム力役リョクづぶら奉  
へてあくニ而丸が多病タラは小半切コハニツよとわび小祕を  
きびーそ道ミサカと申ミムともわざくおらうと筆ヒツば  
念ヒツりくふべーと申ミムと秘ヒツもつとぬヒツと  
かくゆも私シカクの富純ヒツンうとあたるアタルやちとくれ別  
あも歎ヒツハ流リュウびひのでとへ寢後シメゴの内シナえど  
ひふありくろありたりと申ミム信體シンボウの暗アマガ

今て安あらへゆんとのひづれが附えひづじくふ  
ちけきびりうくせきもまきもはさう入滅の時ま被  
あてゆのそと云被<sup>おほ</sup>いふ御被<sup>おほ</sup>小遷化<sup>アゲル</sup>にさう  
保延年中より守後左近内へたる法事の左近へ  
あらぬめあひあらびまひあら経<sup>エ</sup>年月とすまえ  
サ八日小左近を繕<sup>アハ</sup>ひめひぬかて年月とすまえ  
保元の礼<sup>リ</sup>とぞそ経<sup>エ</sup>くさびまきれば左近の  
世<sup>セ</sup>がえいと同<sup>シ</sup>やくらり一<sup>イチ</sup>かうり<sup>カウリ</sup>経<sup>エ</sup>つス<sup>ス</sup>経<sup>エ</sup>  
あつまてわづくを<sup>アハ</sup>されど保元二年七月十日  
ガ<sup>アハ</sup>三時と<sup>アハ</sup>三時小ヨトテ<sup>アハ</sup>ひづれ黒深袋

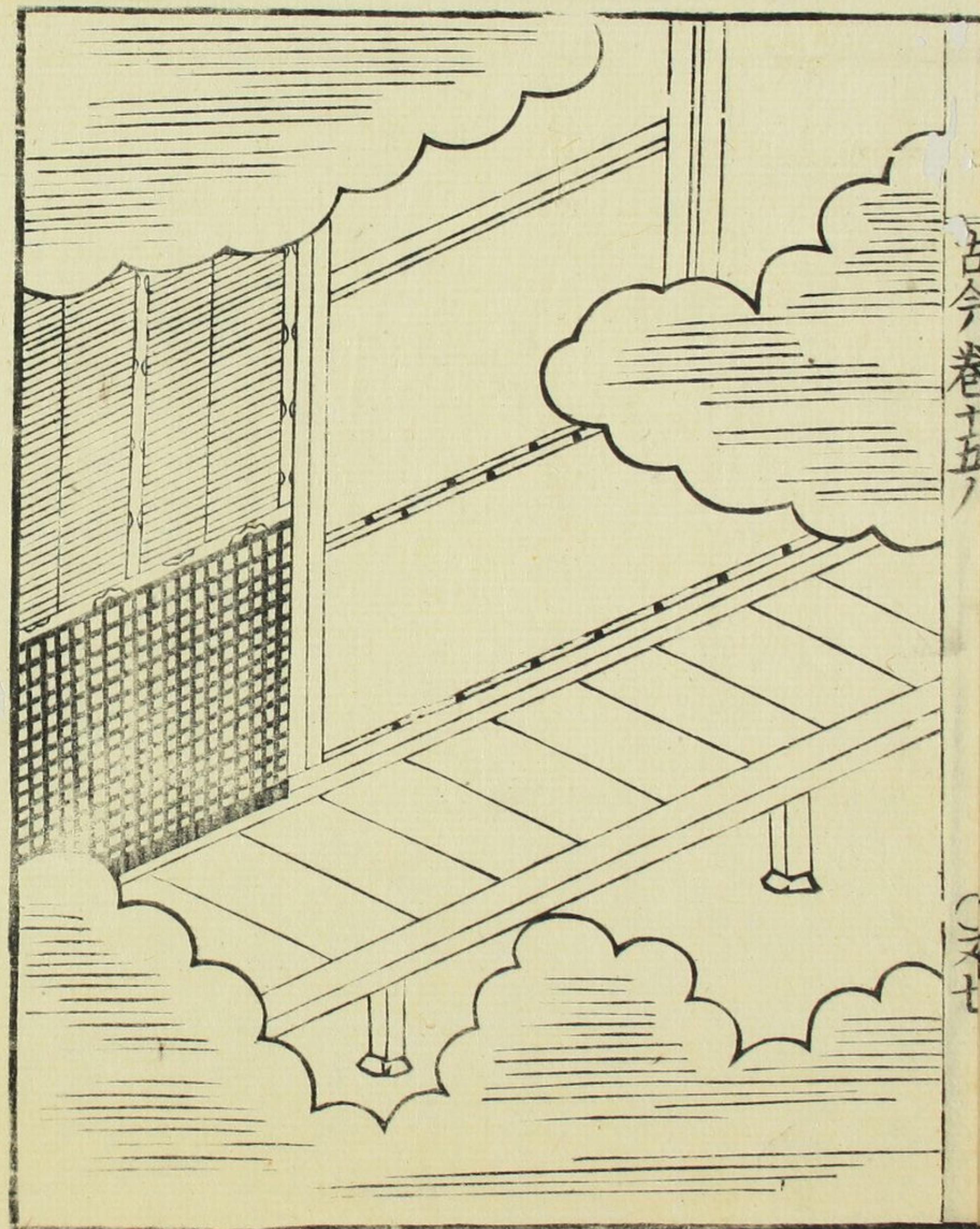
ミニ<sup>ミニ</sup>キモ<sup>モ</sup>是<sup>シ</sup>候<sup>フ</sup>ちゆう<sup>チ</sup>御<sup>ム</sup>人<sup>ヒ</sup>五位<sup>ゴイ</sup>人<sup>ヒ</sup>傍<sup>ハタ</sup>人<sup>ヒ</sup>車  
の<sup>ノ</sup>里<sup>リ</sup>くふうち<sup>ク</sup>ゆり<sup>ユ</sup>き<sup>キ</sup>う<sup>ク</sup>極<sup>カ</sup>左<sup>シ</sup>肩<sup>カ</sup>の<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>く<sup>ヒ</sup>よ<sup>ヒ</sup>因  
めり<sup>メリ</sup>を<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>む<sup>シ</sup>れ<sup>レ</sup>大<sup>カ</sup>吹<sup>カ</sup>内<sup>シ</sup>左<sup>シ</sup>肩<sup>カ</sup>の<sup>ノ</sup>大<sup>カ</sup>ね<sup>カ</sup>そ<sup>シ</sup>あ<sup>シ</sup>う  
内<sup>シ</sup>き<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>後<sup>カ</sup>左<sup>シ</sup>府<sup>カ</sup>の<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>候<sup>フ</sup>の<sup>ノ</sup>見<sup>シ</sup>途  
あ<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>れ<sup>レ</sup>た<sup>シ</sup>ち<sup>シ</sup>の<sup>ノ</sup>お<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>ひ<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>ね<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>ら<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>  
じ<sup>シ</sup>ふ<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>ハ<sup>シ</sup>病<sup>シ</sup>よ<sup>シ</sup>川<sup>シ</sup>そ<sup>シ</sup>の<sup>ノ</sup>ら<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>れ<sup>シ</sup>れ<sup>シ</sup>  
キ<sup>シ</sup>あ<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>あ<sup>シ</sup>ば<sup>シ</sup>ゆ<sup>シ</sup>そ<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>へ<sup>シ</sup>が<sup>シ</sup>め<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>よ<sup>シ</sup>  
か<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>げ<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>つ<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>ま<sup>シ</sup>小<sup>シ</sup>猪<sup>シ</sup>籍<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>  
足<sup>シ</sup>あ<sup>シ</sup>ん<sup>シ</sup>す<sup>シ</sup>ね<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>ひ<sup>シ</sup>お<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>あれ<sup>シ</sup>ど<sup>シ</sup>方<sup>シ</sup>一<sup>シ</sup>度<sup>シ</sup>今  
い<sup>シ</sup>え<sup>シ</sup>ゆ<sup>シ</sup>ば<sup>シ</sup>お<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>一<sup>シ</sup>こ<sup>シ</sup>な<sup>シ</sup>れ<sup>シ</sup>ば<sup>シ</sup>猪<sup>シ</sup>籍<sup>シ</sup>

まへゆきと右府のふるやまひくつり落氣ばたぬ  
右小ぎうきてぬく礼若ありて三條大納言中の  
かくちりまき門のよを送りやられたり卒  
二ふをかまひあらび右府のふる花園れな宮のゆ  
ゆづりみて左府の道へとくたわよかみひに小  
そうちみまことくらくゆうじをかひよられをゆ  
あらひふゑざれ事へ

仁平三年の法より考時入たま病と更ゝあきるに  
次の年正月十一日小林もんび入た後事すねすむにて  
一命もかぐさかものあははあふまくせぬい



うつらに夢情病ばゆどくさびておれ  
らば、夢あきく体ぬ。一葉あるよりあれ、冷人乞  
て、簾経みぞうおもむく、瓦色と隙。ドジひまり  
夢情人罪あふめりとぞ、ゆきやく、久春あて、妙處  
魚のうをねのよきりあふれ、尔をす。かりあゆはせり  
え、あはき後、ふま病とよそへ、念ひゆく、ばいそや  
だまくに、有れよひれく、玉成ゆき、ぐりやうそ  
わづれふけれ、ゑねたおゆひの、ゆくうの、ゑ  
人のと、もうくつるうての、ざれきあはれ、へゑふわる  
て、あべうべうじ、一葉あびて、すゑ



て後あく筋成とくべくもん半てとそやりまく  
ゑ保二年正月小出家同月亦日廿一八十にて  
うを落へみありと後ニ東院の附のやくの作り  
筋成の筋成の統てゆゑ院事よ初向みまつにい  
ゆやわくかとかく巻きをまくさく成せとの  
書は小皮大紙の筋成息あり宗輔と書れりうと  
里失ゆ人へひたとあやーくていふとて所後され  
ばそのくみ勢ハ一通状りとて卷きをまくて所  
だふられとすきあうさうだくろまかばーて清宗  
内玉ては傳承小りゆひりすれりうくひくまへ

おひきと巻きあまを落ちて世成てえ生成之  
おさゆのれんかくもんとそいもつてぬか  
ねりえはき

おひきと巻きあまを落ちて世成てえ生成之  
おさゆのれんかくもんとそいもつてぬか  
ねりえはき  
おひきと巻きあまを落ちて世成てえ生成之  
おさゆのれんかくもんとそいもつてぬか  
ねりえはき  
おひきと巻きあまを落ちて世成てえ生成之  
おさゆのれんかくもんとそいもつてぬか  
ねりえはき  
おひきと巻きあまを落ちて世成てえ生成之  
おさゆのれんかくもんとそいもつてぬか  
ねりえはき

宿枕にてひり筋おとやねとなじゆるかわらばその  
よのうかづきにあつては筆のとものがある  
へあらはようとかまく

大監物を原代守先へ侍ま生の中あらぬ參の者  
みてさんじゆるあ海の牛かじこ薄すま細小は  
さしてはまへどりきりあり是もあ二年半病と  
あら日ひあやめをあらわしくかへるがれだ例の  
狂ふかづりきりまざく八月いせんよ上原にて就る  
小海のとあるかづりきりまざくに考究され  
於焉方でのうぬ八月七日宿泊しめし御のそ

にあらざみのうのあねとて宿のからうとあら  
よ處度とありもれどああよきうもとあら代通  
と物をあよづれらるる事あくまでうきうてがきうとあ  
じめくとあふきりいたかひやうりきんあのむりえ  
宿枕よひれくあくれ

義太酒云實雲あ承元年小きあらびあら  
ああが法暑堂の山社系小中物すよりのれ  
えど子息二人の肩あらうとまくとあらうとも  
後いとゞりくおれよなれど八角お雲のひじす  
大豪也あえの山社すとあらきる人とあらへよ

おり、うりきと大内をかりぬひもひてゆき  
あらん故内府ハ信濃守の内府の未抱子ども  
そそりじみ實事は後度を度経げずすら  
二度の御抱子とどうゆくにゆくまつてこそられ  
とヤ兵のうえゆくへたるのとおもとよりゆくも無事  
小官途のねづびをすとおがゆかくも無事  
かどのと成程もすとおがゆかくも無事  
かもおれのとあれつて四年正月三百うせ  
まいよきり通の御づみかたすめや  
あらはれをゆきとおもとおもと空居のあへ

そぞりうりぬ年下りの後御ゆりて年は生  
考めてもうまともいふて後處を寺を空の  
ゆりてとぞうとすとおが内下うつ内代をへよれ  
宿舎のひのふやくをすきりあへとて人よ  
ゑとれられへとびととくとくれるをよそ  
きくとくとびのむねほくとくとくとくとくとく  
ゆきとくとびのむねほくとくとくとくとくとくとく  
おとれりおとれりおとれりおとれりおとれり  
おとれりおとれりおとれりおとれりおとれり  
おとれりおとれりおとれりおとれりおとれり

とおもひて善光寺へりぬらむとひやかがるあつち  
うれしむよわくものうちあくまゆふくらむのあめ  
様にゆかうえあつらうきと傳ふて實  
寺のゆゑにびへみおつりきりふくとゆかく様  
のゆゑにますうめられがやおひづきふくとや  
きをちてあめくと希のゆゑくじよがればやうは  
見ゆゑきりむかとせふ候ゆく御の上ふよひ  
のがれくゆく今のがれくゆく御の上ふよひ  
されどありともゆくゆくゆくゆく事よ  
切歎経よ往來すとゆくゆくゆくゆくゆくゆく

おうづぎによあうり居てからむれんはお御宿  
御とあまをわが御了きうる事下の又大廟に於家  
御と推奉わたりまへあ窮大ふけよまざれゆえ  
あらぬありゆゑもくせみゆのりよたゆでそのを  
ゆくうて人よあえられまひがだまゆ世とのれ舊  
んぶるんをどやせりとかねまく御よこまくされ  
たか見事と云ひて御みえをあらはすとやせきて出  
あの男もて只せんすすめ法師などさんどれが  
主家とびくはれまくふがりと着くれればあり  
あらゆきまくしてゆりぬ住處のあでゆゆき

ごくまことに御用事の事はよほど  
多くありすとほどのことをりやうす  
がゆゑをきたあくまに相手あらざれ  
えよおへりまといひにそひて見事  
の財あり乍らそぞりされうちせば  
ゆくありきりとも唐かひりがちふる  
世の流れをこれもあらわす  
からいゆく一歩き

おおう、この間の情況をよく詰め取らせて  
あまくお手がどもとびきりやうやくの

勞通外トシカヘリテノ時ニテ全病トニ申サセ  
カニモニ日教ト送キル次第よハ事ムハ理ニ  
モカ事アテ有令アムアキニ<sup>シテ</sup>ハ御事也大体  
ヤズクセ持てアシテ<sup>シテ</sup>病席ム有リテ西号丸ヤ

うりきむるもあれば春通うしけどとあまうすうち  
ハテて痛石もうじてみるゝたるとひりてひつじと  
ゆゑはわのよしをきくと日教つらひわづる云  
かかくもよしとよしとヤシレバやくととがれ  
トてゆのまの病うてはあうりきつまくすけうゆ  
とやじくもくあいが怪ふねうきとくにひらきと  
きれも理伝の屍の略まとあんじるくそれハゆ  
うきくわうびうべ我そんあみくわくとくのあ  
くうんとせあきせきて殺ともうきふーととあ  
きを経ふくとおうくぎりさればとそとくとくあ

りうてゆきを経りてゆくと道行かりくせんめいわ  
まくかほくとおん半へ口清うめべーえんば南文端  
序かと物の秘為裏改修後継老齋以希見重改  
修人情とゆそりとせられせあふ加くと道  
やう角く邊遠うあうじよほりとそもく思  
え半かれだひゆてよア体べー後も筋筋ハノイよ  
い観想かうワセモひく院よ写體せきをまづまづ  
かふさう附考道翁トヤウルふりてヤウセラヘ思へ  
われて右の山比巴ハ蔓草すきとくもう人の折  
あがくうよくうれいを経るとつづかぬと

空氣にふりれすやうう列のわ下と弓場を出で  
へ考へくほの肉厚とりてアキのゆつは少ぬあらざれ  
バ考へやきうもるから空庫に比巴ハ馬流を  
かま捨合せてこれ馬流やくひと八郎の弓木に引  
て鷹の流とつて人ありおも流ぬあたどまうあ  
さを落とし今とんがまくその間度をもれ  
セ猿の馬流とゆくて伍流とが次よともせ落と  
あさぐらに内松毛のさわくひも御毛のての歌  
玉ハ櫛流とゆるわんふえようくれひまどされを餘  
地ハ馬流みて同出といひ入船又ゆうてゆくも

事第一おおうり一矢とのゆとへやてゆそうとどり  
あれバ肉厚あるやうと表一トもれふやう是なり  
て空桶口をあくまであた射下に伍傳後より  
まくゆりふやみとねててすまくさうとあつてこれ  
やうへ始らるやくもくして空手瓶の財ぶりうつあ  
素志と改めよせんすのとねぐら金附めあくまにと  
あくべ年未だなとばか附に付あくせゆう年未だ  
生廢れりもじ年ひそばの物幼いゆくみおば  
養の定りゆりとくやうに空桶と元流せくれゆくと  
かくくやうれかねじ年ものとれあひよの族

あがんすうじえふ室浦はまくわせあゆうすられ  
挽ひりんがくとやどくわづてもあすらにり  
は原湯生ひ三十八年うち鶴<sup>タケ</sup>の野へ移て我らる  
父の妻かやようばとみやくに令とめすべとぞ  
はれきわむけのひと神<sup>カミ</sup>ふうあひくそられ撫葉  
うらまくさりていゆべくべ嫡女孝孫吉氣<sup>ヨシ</sup>  
ああにゆうゆめてもくとくじゆとあくえ  
とて西おのや琵琶<sup>ハバ</sup>とあかくしてくやくゆうく  
をやくく比巴<sup>ヒハ</sup>かくばぐくあすりけととくと  
えくへりあうきく代<sup>タメ</sup>にうかんふわくゆくが  
わくへりうれすりす

まくわくとよまれはうきへゆひきうきくわ  
とゆまくがゆねりゆ葉<sup>ハ</sup>あくできくにびゆくと  
やくろきり下ゆのほえとおこなうてへほ事<sup>ハ</sup>  
うつととくわくにだ比巴<sup>ヒハ</sup>とくくひくとくを  
うもやくとくとくとくとくとくとくとくとく  
くふくくとくとくとくとくとくとくとくとく  
まくのくへわくわくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

わくわくわくわくわくわくわくわくわく

金<sup>キ</sup>舞<sup>モ</sup>は<sup>カ</sup>櫻<sup>シラカシ</sup>とく者<sup>シテ</sup>くわく<sup>ク</sup>鞠<sup>スル</sup>事<sup>モノ</sup>

ひきやうせりゆへんときりのみくわしづあ  
食の所がおりてもてて食の所がかくむ  
枝のあらわのゆはるとやうてひくらの要  
たすふみかく食日書に今てをとあふへよ  
みぢかとくさうもとゆくうゑあんやとと  
きれどあらわれまくら跡あしてあ序  
愈々くらゆりてやほつと方歌の序の字が  
ゆくひよかと聲法へと大団ドウの山鹿邑  
駕せはれとひのくれば別院坐つてゆく  
宿をとく者と古知識のあす

代よりて六般のうがふ打わてく御はうへつゆる  
うきり松列ゆきりわりゆきる  
落主高序ハ第ニ和くが聲と大歌基政うの  
典代物傳つゝへる縁のでーおぬのハあれと  
ゆふに基實大富貴お實は才小能一竹  
きりのよお實がとく、聲傳つてゐるゆと  
あれどお實ひとくとくりて後ち明代のゆと  
はゆよからてへ鳴くね鳴して吹くは匂宣を  
きて、きりのゆねりとくとくに基實に鳴く  
後又お實うせにあればお基實眼ゆきゆき

かと申す。かくいに幕序を以て、以ては後つゝ、  
つるをさへすれば、京基主服の身が、嚴  
室の神されど、かまくほしは、アモロトハ、  
大納戸の具は別あず。まほ御殿といひて、やうせんと  
せきせき院よ、而て、ま基下薦つる人、而て  
主膳くらうすしのものかと申す。よふをせう  
きもとと、京基アキタヒと、神されやうと、行  
持の、いわゆる事ふと、くへをとす。されば、  
主膳の身もて、行の時拂門のとこも、わからぬ  
ゆかずして、行るを足例ゆく。即ち、小さく、

が多へん。かくして、節成參せん。かねが後段  
友はるよと見て、あくまく作られ、て、うの御  
事とあまつて、本と無あり。今、ま基序  
あらん。ゆくと、作りきせれども、ゆきと、取  
き事基ゆ。安所なる。ひととおり、神焉主相  
れのまゝ、參とが、昇進今と、とみゆり。りく  
きて、ひめこめよ。あたみ佐乃監までの、ぐりに、  
あてて、くた車へ  
前中納言空翻。かくいの身を經ゆとも、らざう  
き。ハ寛元四年の脱履の身。先より化廻り

執持とめく拂々清廉のまことをうなづき又  
のたぐの底みや催せん遠もえ年のひ葉室に  
絶えのじうれ袖の邊よ山底と魚てももまゆ  
三年八月十九日承かひまく海の院後政前  
候致ねまくあれあさるに上り生下どやまさん  
かづしてとめ作しきざれじてよもやかには  
よて四十石のわづきの御事、およへく  
うらだちう一ちむに肩掛ふりのままでお  
りほりある

寛長二年三月廿四十三仲秋八月三五節

新發嘉定縣

夜坐依塵入佛乃感傷内催独吟か形而已  
遙乃祖父恩依拂葉室草房空石亦不以  
勒玉多日忘俗鳥見併一室孤曉辭東流紅  
塵隔秋過西山白月因發高歌零落蕭瑟  
困花勢盛覩心蓮也寃血相逢夜落蕭瑟  
先生卦发年陶令亮え帰林至秋四十三  
曾祖令透郎代朝陽何耶耻俗八月十四日  
景氣達流自然終所

筆の室山あくいじうよゆよゆ

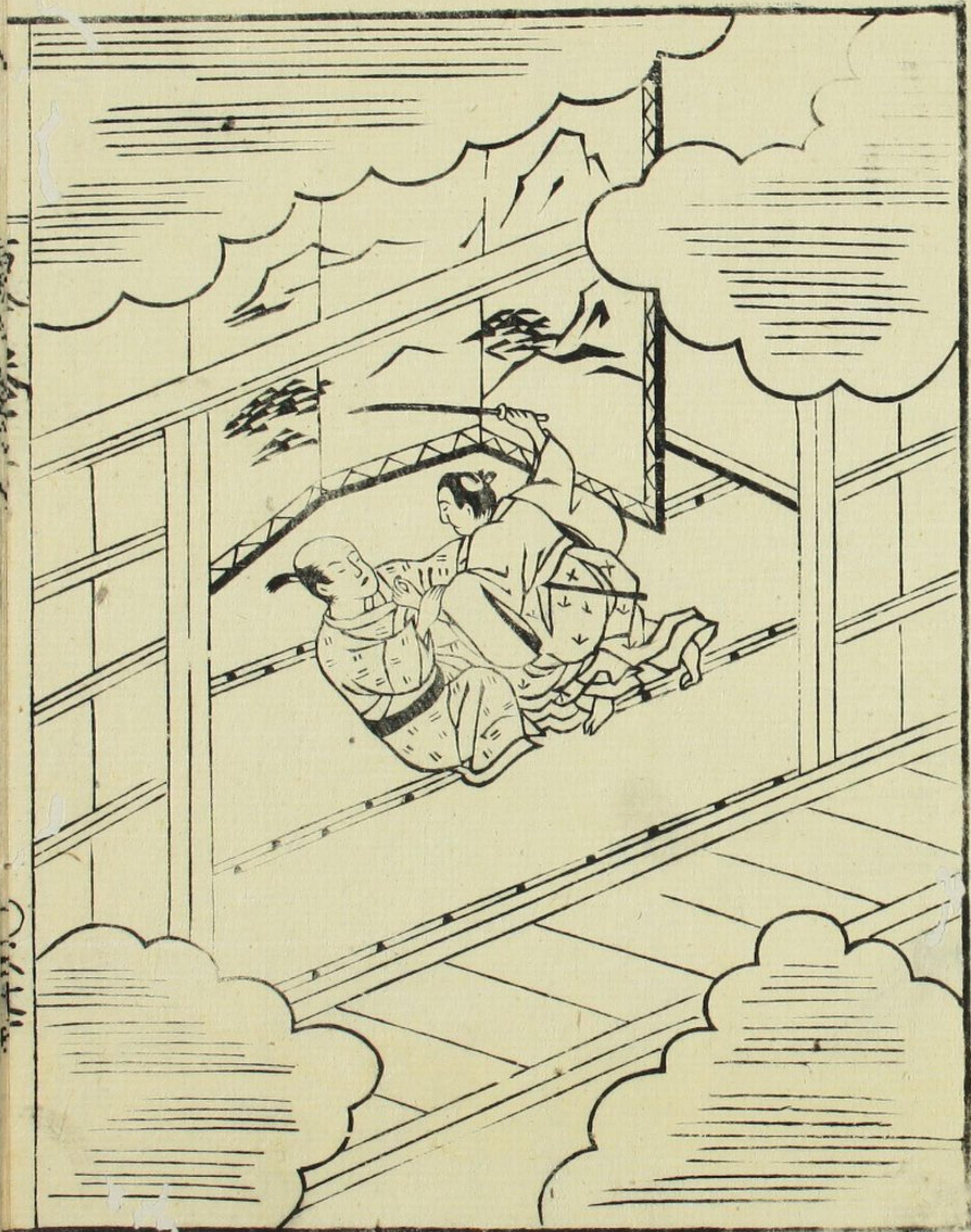
りりわう道へ月をうらみね  
孤の通のめらばふとそめく  
ねのゆきよほじもとせん  
魚てせりあくびとまへひぐく下アシと  
まきさう生寛の月日と魚とアシ陶令タウジンが詩と思れ  
うきらはくうのうの言をきよにこそ世人  
ゆきよすうだりかことお詮危ハラハリと詔ハラハリ和  
うきよゆくと興と事

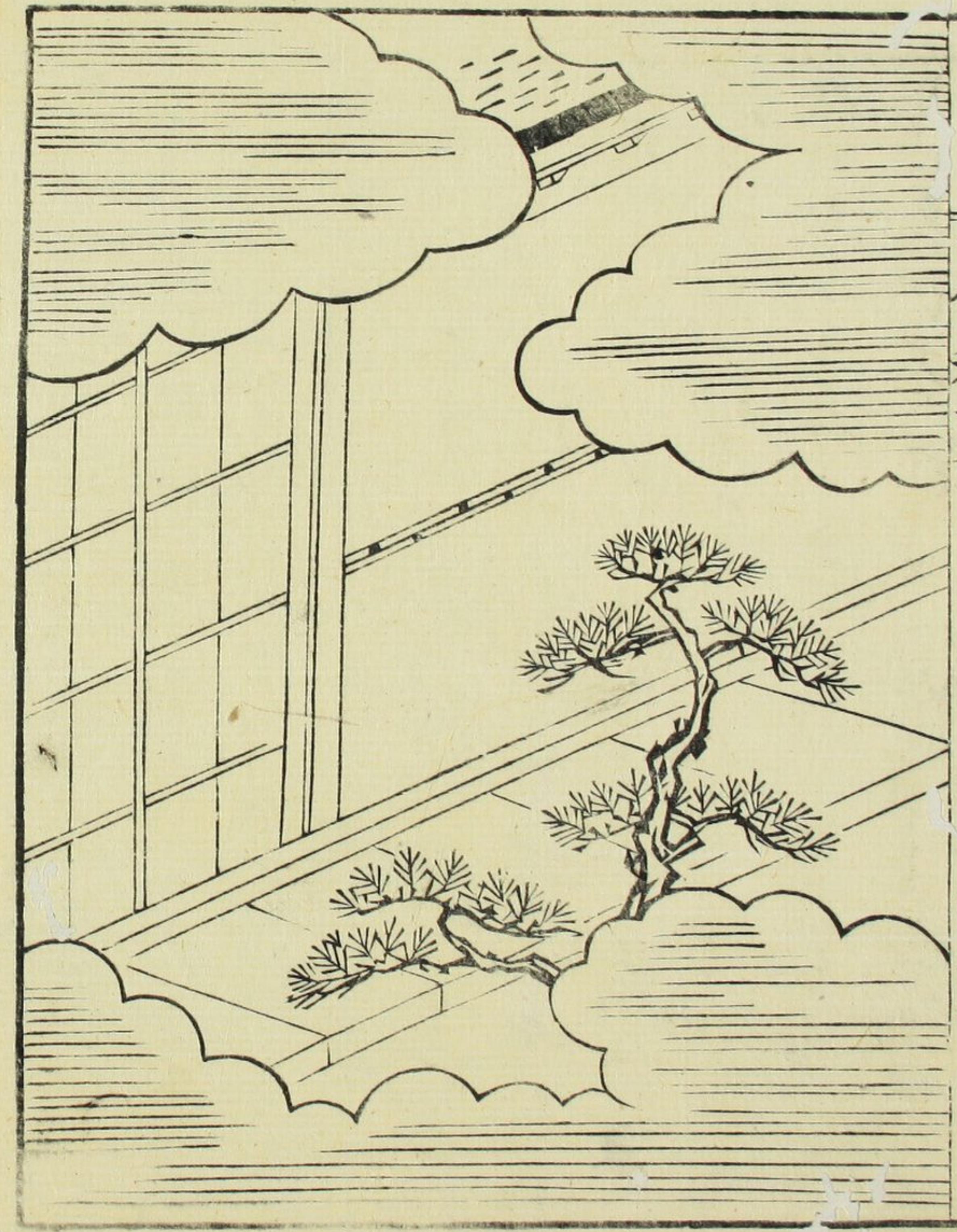
## 宿狹平

鬪争トウジョウ や古ヤコ  
鬪争トウジョウ 起ヨリ 自ソイ び及ヒテ 大オホ 鳥トリ 帝テイ 雄ウラ 多タマ 以ヒテ 死フツル 九クシ 有ル  
血氣皆アツキ 互ヒテ 爭ツブシ 心能ハラフ 互ヒテ 小コトハ 慵ハラハリ 致ハシメル 鬪ハラハリ 来ハラハリ 然ハラハリ 可ハラハリ 怜ハラハリ  
ミミ 無モ 先サヘ 買ケン 回ハシメル 後ハラハリ 五ゴ 沢ツバ 何ハナダ  
保元六年夏の山瀬サンセ 岸アシ の備ベニ 文道推ハラハリ 別ハラハリ ひ  
伏ハラハリ て 備ベニ うきえハラハリ ふきうハラハリ 第ハラハリ 生源ハラハリ 義賢ハラハリ 批ハラハリ 則ハラハリ  
とくめて 備ベニ うきえハラハリ ふきうハラハリ 第ハラハリ 生源ハラハリ 義賢ハラハリ 批ハラハリ 則ハラハリ  
出ハラハリ 事ハラハリ と義賢ハラハリ 批ハラハリ 人ハラハリ と 無モ ありハラハリ あるハラハリ と  
うれされ大オホ 休ハラハリ せうハラハリ がくハラハリ かくハラハリ 事ハラハリ あハラハリ 別ハラハリ  
かハラハリ うハラハリ とハラハリ うハラハリ がハラハリ うハラハリ

萬人一人大びと餘りの者をうへて一人そばたまの巣長  
參事の事清が下りてゆきめりもまつて二人を主尉務義  
が前而後のより多あはれん御とば重臣文代竹中源  
有兵六千而後御より別れあとなりて檢狀遠征と也  
氣丸とえりとくとあ、おへ食ふる高部の國日よれから  
きくうちかりきくとねむる勅をすくはげりぞれが矣  
おのとぞく今りわざれはまほ併の事今へ檢狀遠  
征資材おみあびくせりと御へおもへぬ前駆をすとせ  
ゆき軍方すり下社へアめりあゆうを半身りを敵がば乗  
てゆき恐れびとておゆくにそりはれへおへ大和田

と紅停車くれ燒小屋うきぬがたよ始て那と  
さうりきるあくちて猿轡さむりかくうもあいと  
たとハ廻遊の後もよめて往來をすひきうつうの馬  
足を力一衝立春と多しくびくぎりと落とばまの  
さうひのぞくれてう傷ふざまれたり  
辭覺法やれよたに元あゆべりとやゆやめは  
うけあげと男まきり威附とす阿奴冠とみ  
どうらきり狂一月儀としわづてばお宿で月寄  
て色その下とつみてせり酒はしつてありせがま  
とよもじりりきに山巒あづむむどくとく





きよと取て、敵よあらうえ刀とうらへ  
ゑうとおのれの大男と相手をうふまで刀片  
うりて、既ふこゑとおもひがいとおもん  
生すうじ後とうれりとくえだとやくとおれりと  
おれバ害せんす。涕ゑごくばかうす。痛  
そ必死とげき身に功業ふゆが命ぬとせん。寛  
に縮つくりて、おれやとえまのくてもりりねえ  
ほ下は前よりてかゆまうそひれとてまひ  
始あうりて、度てぬれ列く泥みどりゆぢ  
きゆの者とぞか。敵の男四萬六千兵を乞

人余もくじれつまえさざか代小冠とくにむきえ  
つまえの御とくにうをめにせりがはりておおむ  
せうれくかうがひきく。近よ寄せたぬづくらがく  
事あよがくしてゆくられよきる日ひのかれの見  
候れ假りやまやは男びくらひくらふくらふくら  
のやにれりひきくらがくあわすまうとけく侍  
候ふうれねううくらふくらのゆく令とがゆ  
まくまくもわゆありき故に歌ふ歌ふれどくやくは  
ある様べと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
ゆもゆうりあゆふと云ふと云ふと云ふと云ふ

て身の角がとどけたりかせばアリテ身は眞男やうで  
を身重て身と身りゆくは又小らせてえむせんへそそぞ  
れタクタク人を害す程もアハヤヌ又あはれぐくび  
よきにあゆみへと身勇くちあがく一財を奪ひ  
けりらふそりて身利一山毛りふきるそそく世に義  
か誠み狀

かのうへ右府の守軍あはて貢物を大名へ奉りて  
ゆきの所の今義村をもうちまつてむかひ  
の座よかトありて後子孫の分廻相ありて方ち  
りゆきの者有みてやうやくたれくわが人所もけど

度とせめる義村が從ふて少う義村もあ  
がくそらりといきどくのりてのれよと下緒お  
説ど成るねどもとちりさりに鳳綱もくも  
氣ふりうりやあつて三浦やハ友代からとをち  
うり福圓な筆づ食糞の時の事はひくの麻かり  
ゆめうりあつてひくのまきり

天福元年祇臺を十列よ院のむね曹參久瀧也相  
ゆておはせうりきりびと車ふきて行つて  
ひとさかた太角の難文也府生參が無友もす  
車ふのりてひくの行つてうりが車よ久瀧ふさん

ふをとまつてうりを車りうきくやされば久瀧を車  
出居もとれば久瀧やまくはひりぬ御のうそを  
く車りうきりあてまくぬいもふともせな  
べよとよもあれば車りひりぬ御のうそを  
車う無ありてまくぬく車りぬくにとく  
れのりを車へにりひりぬわ



